中学生の問いづくりとその探究プロセス
―中学校社会科を事例に―

金子遥 [*1]・阿部晃平 [*2]

Question Formulation and the Inquiry Process of Junior High School Students : A Junior High School Social Studies Example

Haruka KANEKO Kohei ABE

抄　録：本研究では、学習者がどのように学ぶかという探究のプロセスに着目し、学習者が問いづくりを行った学習について考察する。探究には、ある問いを追究し、解決していくという要素があり、その点で問いはその学習を規定し探究の質にも影響を与える重要なものである。本研究では、問いを学習者が作る「問いづくり」とその探究プロセスを示し、生徒が実際どのような問いを導き出したか、そして最終的にどのような成果物を作ったかを中学校社会科を事例として報告する。

キーワード：問いづくり、社会科、探究、実践分析、中学校

Ⅰ．中学校社会科授業の問いづくりとその意義

1.1　中学校社会科授業の現状

中学校社会科の授業では、社会との関わりを意識し、主体的に学習に取り組む授業づくりが目指されている。一昔前のいわゆる「知識注入型」の授業を越え、知識をどう活用するか、または組み合わせて考えられるかといった思考力の育成を基盤とした授業をどう作っていくかが研究の主眼となった。同時に、学習者がどう学んでいくかという探究のプロセスにも注目が集まっている。これは高等学校で2022年度より実施されている「理数探究」「総合的な探究の時間」といった探究科目の設置、社会系科目でも「○○総合」「○○探究」として地理歴史科が整理されたことなどが背景にあり、探究のプロセスに関する研究が大いに望まれているところでもある。

探究にはいくつかの定義が存在するが、共通する点は、ある問いを追究し、解決していく過程であるといえる。本研究では、問いを学習者が作成するという「問いづくり」に着目した。問いづくりは、Dan ROTHSTEINほか（2014）が、学習者が高次な思考を働かせるものとして紹介し、新しい可能性に心を開く「発散思考」、アイディアを統合、分析、解釈する「収束思考」、自分が考えていることについて振り返る「メタ認知思考」を磨く方法として提起した（pp. 32–38）。

1.2　問いづくりの必要性

問いづくり（「問い作り」「質問づくり」と示される場合も）は、学習課題を設定する活動として、これまでもいくつかの研究が行われてきた。池尻ほか（2022）は、教科書とパワーポイントを用いて歴史の内容解説をした後、Googleフォームを用いて生徒に問いづくりをさせ、教師が回答する授業形式が歴史への関心を部分的に向上させることを明らかにした。橋本（2019）は、マッピングを活用して、問いづくりを初めて行うといった「問いに対する意識」の未熟な学習者に対する問いづくりの検証を行い、学習者が文章内の関連が視覚的に捉えられるようになったことを報告している。木村（2023）は、自己調整学習を「見通す」フェーズ、「実行する」フェーズ、「振

[*1] 中野区立明和中学校
[*2] 福岡市立原中央中学校

り返る」フェーズの 3 段階で説明し、見通すフェーズで思考ツールを活用して問いを広げ、順序立て、しぼっていく学習を提案している（pp. 40–49.）。これらの研究はいずれも、小学校や高等学校のものであり、それを繋ぐ中学校でも問づくりの学習上の必要性は言うまでもない。ある問いを追究し、解決していく過程である探究に対して、学習者自ら問いづくりを行うことが学習のレリバンスを高めることにも繋がる。そこで、本稿では、中学校で問いづくりに焦点を当てた授業構成とそれを探究するプロセスを明らかにする。

Ⅱ．問いづくりに関する理論的背景

本章では、問いづくりに関する理論的背景と先行研究を示す。既存の研究成果を整理し、問いづくりの有効性とその実践例を通じて、教育現場への適用可能性を明らかにする。

2.1　問いづくりの背景

学習指導要領では、中学校社会科の目標として以下のように示されている。

> 課題を追究したり解決したりする活動については，単元など内容や時間のまとまりを見通して学習課題を設定し，諸資料や調査活動などを通して調べたり，思考・判断・表現したりしながら，社会的事象の特色や意味などを理解したり社会への関心を高めたりする学習
> （中略）
> 生徒が社会的事象等から学習課題を見いだし，課題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し，追究結果をまとめ，自分の学びを振り返ったり新たな問いを見いだしたりする方向で充実を図っていくことが大切である
>
> （文部科学省 2017，p. 24，下線筆者）

ここで述べられている「単元など内容や時間のまとまり」を見通した「学習課題」は、学校現場で頻繁に使われている「単元を貫く問い」や「MQ（メインクエスチョン）」に該当すると考えられる。ただ、ここでは、学習課題の設定を「誰が行うのか」という点は示されていないとも読み取れる。

冒頭に述べた高等学校の地理歴史科「歴史総合」では、これまでの項目立てと異なり、次のような学習が示されている。

> 中項目（1）では，生徒にとって身近な生活や社会の変化を表す資料を取り上げて，情報を読み取ったりまとめたりして資料を活用する技能を身に付けるとともに，歴史の大きな変化に伴う生活や社会の変容について考察し，問いを表現する。
> 問いを表現するとは，資料から，生徒が情報を読み取ったりまとめたり，複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより，興味・関心をもったこと，疑問に思ったこと，追究したいことなどを見いだす学習活動を意味している。歴史に対する驚きや素朴な問いが歴史学習の出発点であることを踏まえ，生徒が資料から読み取った歴史についての事象それ自体への問いを表現する中で，学習内容に対する生徒の課題意識を育むことが大切である。生徒が問いを表現する過程においては，単に驚きや素朴な問いの表現のみにとどまらず，中学校までの学習及びこの科目のそれまでの学習を踏まえ，表現した問いを以後の学習内容の課題意識とつながるように指導を工夫することが大切である。
>
> （文部科学省 2018，p. 129，下線筆者）

ここでいう「問いを表現する」とは、「資料から，生徒が情報を読み取ったりまとめたり，複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより，興味・関心をもったこと，疑問に思ったこと，追究したいことなどを見いだす」ことを指している。これは、問いづくりを通して、学習への関心を高め、問いを追究し、解決していく過程を充実させることを示唆しているといえる。

さらに、「生徒が資料から読み取った歴史についての事象それ自体への問いを表現する中で，学習内容に対する生徒の課題意識を育む」や「表現した問いを以後の学習内容の課題意識とつながるように指導を工夫する」という記述から、問いを表現することで、その後の学習で問いを追究していくプロセスでも、課題意識をもちながら進めることができると考えられる。

2.2 問いづくりの先行研究

問いづくりが学習活動において如何に効果的か、ということに関しては、次のような研究が見られる。

重永 (2023) は、能動的な学習活動を目指して、問いを作る活動を高校２年生の現代文Ｂと古文Ｂで実践している。具体的には、学習者が一人ずつ問いを作成し、グループで一つの問いを作るか選ぶ。さらにそれを「内容」「表現」「作者」「発展」という観点から一覧にしている。その後、問いの解決の活動を通じて、学習者が能動的に取り組む様子が見られたことを報告している。藤田 (2021) や内山季方 (2023) は同様に、文学作品を用いて問いづくりを行い、アンケート結果や質の高い問いの要件から、主体的に取り組めることを実感した生徒や意欲的に取り組む児童の姿を報告している。

いずれの研究も、問いを立てることに対する効果において成果を示している。一方で、問いを作るための手法やその問いが「本当に時間をかけて探究するべき問いなのか」といった視点での研究は、不足している。

2.3 問いづくりの実践と課題

以上の先行研究から、問いづくりの課題が見える。その課題とは、問いの立て方と問いの質である。小学校でみられる「私たちの水はどのように運ばれてくるのだろう」といった各時の問いでは、まず水を活用している様子や、雨の様子などを参考に、水に着目させる資料を見せることでその問いを導き出す。それに対して中学校では、学習指導要領を例に挙げると次のような問いが示されている。

> ①東北地方では，高速道路や新幹線，空港や港湾の整備により，どのような変化が見られるのか
> ②地域の自然環境と人々の生活や産業の営みには，どのような結び付きがあるのか
> （文部科学省 2017，pp. 69–70. ）

これらの問いは、小学校で導き出す問いと比較しても、当然ながら質の高い問いであるといえる。例えば、①の問いであれば、高速道路・新幹線・空港・港湾の写真資料に着目すること、さらに他の地方の高速道路・新幹線・空港・港湾や東北地方の過去のものと比較し、交通網が整備されていることを考察することで導き出す問いであろう。②の問いであれば、他の地域での学習で、その地域の自然環境と人々の生活や産業の営みとの結び付きについて、前の単元のまとめなどを改めて参照し、その学習に「一般的共通性や地方的特殊性（文部科学省 2017, p. 35.)」があるといえるかなどを議論することで導き出す問いであろう。しかし、この問いだけ示されていても、どのように問いを立てさせるのかが見えてこない。そして、その問いを導き出すために様々な資料を用意し、議論する時間を数時間設けることは、負担増に伴う教員の長時間労働やカリキュラム・オーバーロードに拍車をかけてしまう。さらに、生徒が問いづくりをした結果、小学校で導き出した問いと差異のない問い（例えば「東北地方の水はどのように運ばれてくるのだろう」など）が出た時、授業者はそれを否定し無理やり「より質の高い問い」を提示するのか、または授業者が問いを無理やり変えさせるのか。いずれにしても、問いづくりという活動は学習への関心の高まりや、その後の学習での課題意識には繋がらないであろう。

以上の問いを踏まえて、以下では本研究で行った問いづくりの方法を示す。本研究の問いづくりで活用する資料は、主に授業者が作成したスライドと教科書資料である。この点で、改めて多くの資料を用意する必要性はなく、教科書から問いづくりを行うことで、新たな内容を追加する必要もない。さらに、問いづくりに用いたスライドを提示し、問いを導く過程を明らかにする。

Ⅲ．単元開発と実践事例

本章では、問いづくりを取り入れた単元開発と中学生の問いづくりの方法を示し、実践した取り組みを示す。

3.1 単元開発

本時は、中学校社会科地理的分野の「中部地方」で実践を行った。この単元で問いづくりを行った理由としては、生徒が問いづくりをする際に意識的に見方・考え方を働かせるようにするためである。中学校社会科地理的分野では、「社会的事象の地理的な見方・考え方」が以下のように示されている。

> 社会的事象の地理的な見方・考え方については，（中略）社会的事象を，位置や空間的な広がりに着目して捉え，地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で，人間の営みと関連付けること
>
> （文部科学省 2017，pp. 29.）

さらに、「中部地方」を含めた日本の諸地域の学習に対応する内容は、以下のように示されている。

> 次の①から⑤までの考察の仕方を基にして，空間的相互依存作用や地域などに着目して，主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して，以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。
>
> ① 自然環境を中核とした考察の仕方
> ② 人口や都市・村落を中核とした考察の仕方
> ③ 産業を中核とした考察の仕方
> ④ 交通や通信を中核とした考察の仕方
> ⑤ その他の事象を中核とした考察の仕方

なお、本単元である中部地方に関する学習は、先に九州地方、中国・四国地方、近畿地方の 3 つの単元を学習した後に実施している。他の諸地域においては地理的な見方・考え方を働かせ、上に示した考察の仕方を基に学習している。しかし、ここまでの 3 つの単元では、授業者から問いを提示し、その問いを基に日本の諸地域について考察していった。そこで、中部地方では、ここまでの 3 つの単元で学習した問いを生かして「問いづくり」を行った。

3.2　問いづくりの方法と使用したスライド

問いづくりの方法として、以下のように進めた。

表１　問いづくりの方法

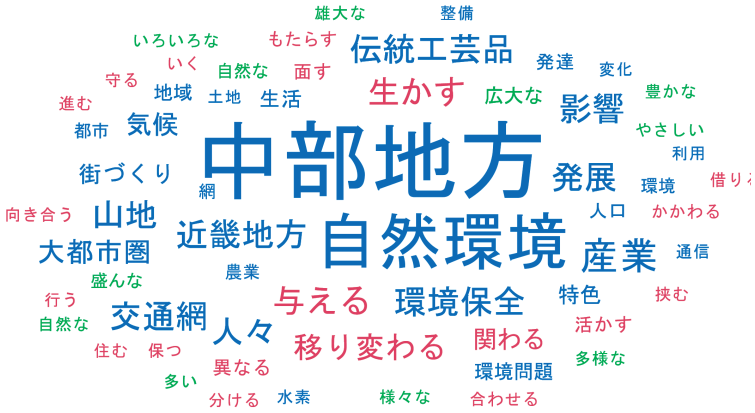
授業の流れ	使用したスライド
①これまで学習した九州地方、中国・四国地方、近畿地方で追究した問いに再度着目し、これまでの日本の諸地域の学習を振り返る。	今までの単元の問い ・九州地方の自然環境は、生活・農業・産業にどう影響しているか？ ・中国・四国地方の交通網・通信網は、生活や産業にどう影響しているか？ ・近畿地方では、人口の増加や産業が発展する中で、どのように環境保全が行われてきただろうか。
②前時までで学習した「近畿地方」を事例として、九州地方で「自然環境」、中国･四国地方で「交通網･通信網」に着目したように、様々な視点からの問いがあることに気付かせる。	他にも考えられる単元の問い ・近畿地方の自然環境は、都市の発展の中で、どのように守られているか？ ・近畿地方では、人口を維持するためにどのような取り組みが行われているか？ ・近畿地方の産業は、人々の生活にどう影響しているか？ ・近畿地方では、歴史的景観を守るために、どのような取り組みが工夫されているだろうか。 ・近畿地方は、都市を発展させるために、交通網・通信網をどのように生かしているか。
③近畿地方の例から、諸地域の考察の仕方に着目させ、その視点から問いづくりを行うことを説明する。	地方の「考察の仕方」 自然環境 人口や都市・村落 産業 交通網・通信網 環境保全 歴史的景観
④考察の仕方を班（3～5名）で1つ選び、その考察の視点から導き出した問いを選ぶ。さらに、1人ずつ追究したい問いを決め、班で1つにしぼっていく。	①「考察の仕方」を班で１つ選ぶ 自然環境、人口や都市・村落、産業 交通網・通信網、環境保全、歴史的景観 ②クラスルームにあるリストから、「考察の仕方」を見て、自分で１つ選ぶ ③班で１人ずつ発表、班で１つに決める ※どれか１つでも、組み合わせても可 ④単元の見通し

Ⅳ．実践分析

4.1　問いづくりで出た問い

前章で示した方法で、Googleフォームを用いたアンケートに考えた問いを記入させ、記入した問いをPDFで送付し、生徒は班で問いを一つ決めた。

表 2　生徒が考えた問い

アンケート結果の説明	アンケート結果
①Googleフォームで入力されたものを考察の仕方ごとにまとめ、PDF形式で学習者の一人一台端末に送付した。学習者はそれを見て、班で問いを考えた。	地方の「考察の仕方」　単元の問いの候補を記入してください。 環境保全　（例）近畿地方では、人口の増加や産業が発展する中で、どのように環境保全が行われてきたか。 環境保全　中部地方は、なぜ雄大な自然を維持し続けられるのだろうか。 環境保全　近畿地方では、環境問題や人口増加などの問題をどのように改善していったのか。 交通網・通信網　環境保全の産業は環境保全とどう関わり合っているのだろか？ 交通網・通信網　なぜ中部地方の交通網は、名古屋を中心に発展しているのか。 交通網・通信網　近畿地方では、農業や産業が発展する中でどのように交通網・通信網を発達させていたのか。 交通網・通信網　中部地方の交通網・通信網は産業や人々の生活にどう影響しているか。 交通網・通信網　中部地方の交通網や自然環境は、産業にどう影響しているのだろうか。 交通網・通信網　中部地方では時代が変化するにつれてどのようにように交通網が変化していったのか 交通網・通信網　中部地方での交通網・通信網の発達は、中部地方の工業の発展とどのように関係しているのだろうか。 交通網・通信網　中部地方の交通網・通信網は産業と発展と人口の増加とどう繋がっているのか？ 産業　中部地方は、なぜ伝統工芸品に関する産業が発展しているのか。 産業　中部地方では、広大な土地がある中で、どのような産業が行われてきたか。 産業　森の力を借りている、環境にやさしいエネルギー(水素など)を使った生活が続いている 産業　中部地方の自然環境は、人々の生活や産業にどのような影響を与えたか。 産業　中部地方では多様な気候がある中で産業がどのように自然環境と関わっているのか。 産業　中部地方の産業は、人々の生活にどのような影響を与えているか 産業　中部地方は、広大な土地や大きな山脈を利用して、どのような産業を発展させているのか。そして、産業を発達させるための交通網や自然環境はどのようになっているのか。 産業　中部地方には山地などが多くあるが、自然環境が産業にどう影響しているか？ 産業　中部地方では豊かな自然環境や交通網の中でどのように産業が発展したのか？ 産業　中部地方の産業は、自然環境や交通網の整備にどのような影響を受けたか 産業　中部地方は気候や地形を産業にどのように活かしているのだろうか。 産業　近畿地方ではどのような文化、産業が盛んであり、どのような地域の特色があるだろうか。 産業　工業や農業はどのように発展したのだろうか、自然環境をもとに考えよう 産業　なぜ中部地方の産業は地域によって大きな違いがあるのだろう 産業　中部地方の産業は人々の生活をどのように豊かにしたのだろうか。 産業　中部地方は、産業を発展させていくなかで、どのような取り組みをしているのだろうか。 産業　中部地方の産業は自然や交通網をどの様に生かしているか 産業　中部地方では、どのような産業が発展してきたのだろうか。また、地形や気候は産業にどのような影響を与えてきたのだろうか 自然環境　富士山のある中部地方は、自然環境をどのように生かしているか。 自然環境　中部地方では、山地が多いことが生活や産業にどのように影響したり、生かしたりしているのか 自然環境　中部地方では、自然環境と産業にどのような関係があるのだろうか。 自然環境　中部地方では、どのような自然環境を保っているのか？また、自然災害に対して、どのような対策をしているのか？ 自然環境　様々な気候がある中部地方ではその気候が産業や人々の生活にどのように影響しているか 自然環境　中部地方の自然環境は、産業の発展や交通物整備にどのような影響を与えているのか 自然環境　中部地方の自然環境は、都市の発展にどのような影響を与え、守られているのだろうか？ 自然環境　中部地方では水資源をどのように利用していただろうか
②「中部地方」の他、考察の仕方や「生かす」「伝統工芸品」など中部地方に即したキーワードを教科書から参照し問いに入れる様子が見られた。	 学習者が考えた問いのAIテキストマイニング

4.2　データ分析と考察

紙面の都合上、1名の探究プロセスとまとめを示す（図1）。この班では、「中部地方で一番住みたい地域はどこか。人口や都市の発展、産業、自然環境、考えよう！」という問いを作り、人口や都市の発展、産業、自然環境といった考察の仕方を組み合わせることを考えた。さらに、その結果として「中部地方で一番住みたい地域」という視点から考察するという問いを作り、探究した。そのプロセスとしては、教科書をベースに「人口」「都市」「産業」「自然環境」を順に考察し、班でまとめた。また、個人では、毎回の学習の振り返りを行うとともに、振り返りの視点として「一番住みたい地域」という課題意識をもっており、「住みやすそう？」「住みにくい」といった問いに

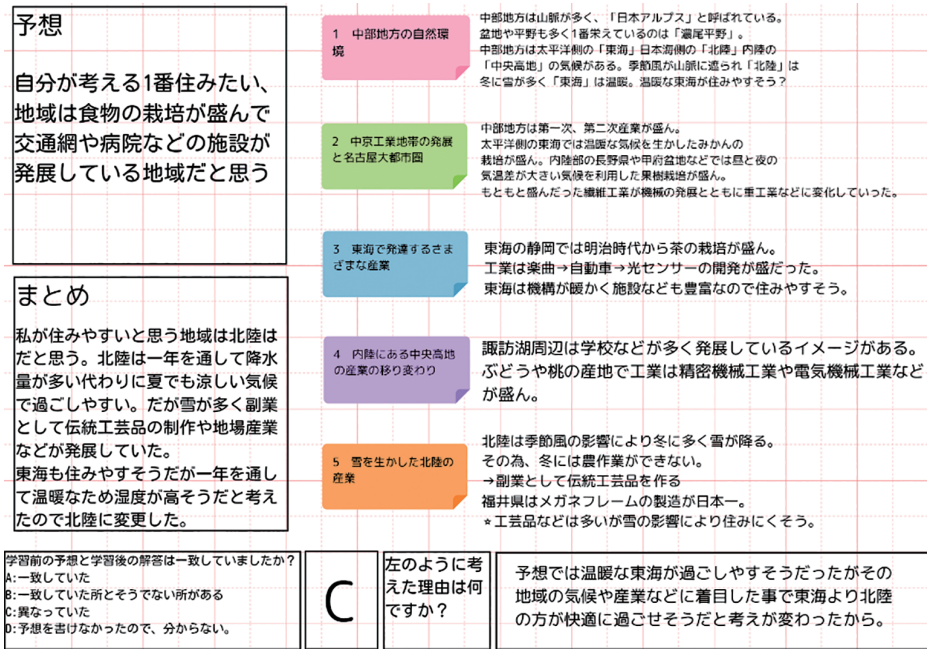


図１　探究プロセスとまとめ

合わせた視点から探究していることが分かる。

Ⅴ．成果と今後の展望

本研究では、中学生の問いづくりとその探究プロセスを示した。中学校社会科を例に、実際に使用したスライドや学習者が考えた問い、習者が最終的にどのような成果物を作ったかを示した。今後は、他の地方でも同様のやり方を行うこと、中学校社会科の歴史的分野や公民的分野でも実践し、問いづくりの方法とその探究プロセスを修正・改善していく。

付記

本稿は、金子が大学院連合教職実践研究科で行った研究をもとに、阿部と授業実践・分析に取り組んだものである。

本研究はJSPS科研費 24H02415（奨励研究）「メタ認知を見取るルーブリックの開発実践研究―中学校社会科歴史的分野を例に―」の助成を受けたものである。

引用・参考文献

池尻良平,相川浩昭,池田めぐみ(2022)「問いづくりを促す世界史授業が歴史の関心と自立的な探究の態度に与える効果の測定」教育メディア研究,28(2),pp.27-37.

内山季方(2023)「文学的な文章教材における『問いづくり』の研究―グループでの『問いづくり』で質の高い問いをつくることを目指して―」国語教育探究,36,pp.18-25.

金子遥（2021b）「メタ認知による抽象化の社会科授業開発―「日本の選挙制度」を例に―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』3,pp.227-236.

金子遥・田中曜次(2022)「環境を視点とした地域教材の開発―小中高の関連を踏まえた地域教材授業開発―」京都教育大学　環境教育研究年報,30,pp.41-50.

金子遥･東俊克(2023)「メタ認知を軸とした社会科の「指導-評価」モデルの開発：中学校社会科「関東地方」を例に」京都教育大学　環境教育研究年報,31,pp.99-108.

木村明憲（2023）『自己調整学習』明治図書出版.

重永和馬(2023)「問い作りの授業実践と考察―高校 2 年生の現代文と古典での実践を中心に―」国語教育思想研究,32, pp. 230-239.

Dan ROTHSTEIN（ダン・ロススタイン）・Luz SANTANA（ルース・サンタナ)(2015)『たった一つを変えるだけ: クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論.

橋本祐樹(2019)「国語科の「見方・考え方」と問いの意識―マッピングを用いた問いづくりの学習デザイン―」国語科学習デザイン,2(2), pp. 87-96.

藤田菜々子(2021)「高等学校国語科 現代文Ｂにおける「学びのエンゲージメント」を生み出す「質問づくり」の内容と有効性に関する研究：夏目漱石「こころ」を教材として」京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報,10, pp. 75-86.

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編」東洋館出版.

文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領（平成29年告示）解説　地理歴史編」東洋館出版.